

中高生（だけじゃない）ガイドの 皆さんによる 作品紹介コメント

本展では、中高生、そして社会人の皆さんが、展示作品の「ガイド」として、気になる1点などについて、さまざまな角度から紹介コメントを書いてくださいました。

ガイドの皆さんがとらえてくださったものは、作品鑑賞において新たな気づきをもたらしてくれると思います。作品とともにゆっくりご覧ください。

山喜多二郎太 《秋》 1962年 油彩、キャンバス

この絵に近づきながら、秋だな、と何故だか思いました。鮮やかな赤と黄色が、紅葉と銀杏の葉を思い出すから？近づいて題名を確認すると、『秋』とあってビックリしました。そう思って見ると、この紫はブドウかな、この黄土色はカボチャかな。形ではなく、色が訴えてきます。ピンクっぽい紫はサツマイモかな、紫っぽい青はナスかな…と思いつく秋は、食欲の秋ばかり。あ、でも水色は、天高く…と言われる秋の空かな、とか。毎年紅葉狩りに行くわけでもないけれど、出掛けられないとなると、なんだか急に惜しくなったりして。そんなことを思っていたから、赤や黄色がとりわけ鮮やかに目に映ったのかもしれない。この鮮やかな画面に、どんな秋を見つけるかは、見る人のその時の気持ち次第なのかもしれませんね。もう一度見に行ったら、今度はどんな秋を感じられるかな。人の多い行楽地でよりも、一枚の絵画で秋を楽しめたような気持ちがしました。

[ごんちゃん]

小島鼎子 《若竹》 1961年 紙本着色

小学校の校章が若竹でした。若竹は、何ものにも負けず、上へ上へとすくすくと伸びるから、というものでしたが、久しぶりにそのことを思い出させるものでした。修復以前の状態はもちろん知らないのですが、何も分からないように美しく修復されていて、描かれているのは根元あたりしかないけれど、正に若竹色のつやつやとした竹の表面の様子から、さやさやと涼やかな音がする静かで平穏な竹林を感じました。

[PON]

「たいせつなじかん」について…

武蔵野市に現在、2,500点を超える作品を所蔵していると聞きいて、どこで観られるのかと思っていたら、吉祥寺美術館で展示会を開催していることを知り、来場してみると、吉祥寺美術館の空間に「武蔵野市ゆかりの作家」の作品が約40点、飾られていた。管理するのも大変と思うなか、修復も継続的におこなっていると聞いて、管理をされている学芸員の方々の苦勞も更に大変とってしまいました。作者が存在しなくなった後も、作品は後世に、観る人に描いた想いを伝えてくるものだと感じているので、作品を永く守る想いや、来場者の時間を大切にしてください。想いが伝わってくる、吉祥寺美術館とその管理をされている学芸員の方々に感謝して、じっくりと各作品の鑑賞をさせていただきました。

[やすま]

小島鼎子 《彩雪》 1953年 紙本着色

武蔵野市のゆかりの作家さんは吉祥寺美術館に行くまで恥ずかしながら存じ上げませんでした。武蔵野の地は本当に芸術の街だったのですね。昔の情景がしのばれるとこの地は本当に緑豊かな素敵な場所だったのだと、大変親しみを覚えました。

今回の作品展で見た作品の中では、小島鼎子さんの「彩雪」作品が一番印象に残りました。

雪に埋もれた葉牡丹が葉を広げている情景は、寒さの中にも耐えて鮮やかな葉を広げ、力強く成長している様子が、なんとなく今の世情に重なって見えて、なんとなく勇気づけられるような温かい気持ちになりました。

[A.A.]

野田九浦 《梅妃》 1914年 絹本着色

「たいせつなじかん」の会場で壁つたいに鑑賞していくと、小島鼎子の《冬霽》《若竹》と、鮮やかな「松」「竹」の並びがありました。続けて足を進めると、野田九浦の《楊貴妃》と《梅妃》という少し趣の違う「梅」を見ることができました。紅梅白梅のように赤と白の対象も鮮やかな両作品ですが、凛としたたずまいの《梅妃》は、頭の位置も高く、その姿を見上げることで、古の世も感じる作品でした。さらに、右から左へと自分の体を動かしつつ鑑賞すると、その瞳も左右するように見え、見つめられるような不思議な感触も感じました。

[ぼち]

小島鼎子 《冬霽》 1961年 紙本着色

美術館に足を運ぶ醍醐味のひとつは、作品と直に向き合い、“体感”できることだろう。事前にチラシや本、ウェブなどで目にした作品を、実際に見てみると、その大きさや質感がまるで違うことがままある。今回、展示室に足を踏み入れるなり、目に飛び込んでくるのが本作品である。吉祥寺に長く暮らし創作活動をおこなっていた“地元ゆかりの画家”小島鼎子による本作品は、(筆者にとっては)思っていたよりもはるかに大きい作品だった。松を題材にした日本画というと、小ぶりで繊細なタッチで描かれているものを(勝手に)イメージしてしまうが、ほとんど余白がないくらい画面いっぱいに描かれた松の葉の緑色に圧倒させられ(金色の描線もアクセントとなっている)、ゴツゴツした枝ぶりとともにこの木の力強さ・生命感を見る者に感じさせる。また、冬の凛とした空気感も漂わせている(なお、「霽」(せい)は、“はれる／はれわたる／心がはれる”といった意だそうだ)。

[A・C・E]

「なんて静かで淡い色彩がきれいな絵だろう」。

私の第一印象は、ゆっくり時間をかけてこの作品と向き合う中で次第に変わっていきました。よく見ると葉牡丹の周りは徐々に雪が溶け、生命の躍動感やあたたかさすら感じられます。寒さにも動じず、根をはった大地で、紫やクリーム色のフリルの葉をそれぞれに広げている姿は、まさに「物事に動じない」という葉牡丹の花言葉そのものだと思います。

「なんて凛とした強さがある絵だろう」。

大正末期から昭和にかけて吉祥寺に暮らし日本画家、小島鼎子さんは長男の達也さんを第二次世界大戦でなくしたそうです。しかし、その深い悲しみにあっても絵を描き続けたと言います。この作品には、そんな作者の強さや生命に対する想いも描かれているのかもしれないと思いました。

私もこの葉牡丹のように、武蔵野の大地に根をはり、自分の個性を広げていきたい、そう思わせる「たいせつなじかん」をくれた作品です。

[わかな]

野田九浦 《癩祭書屋》 1962年 絹本着色

30代半ばにして病魔に蝕まれ、布団に横たわりつつも若干弱った表情を見せる九浦の師、正岡子規を描いたこの作品。

障子越しには高く伸びる樹木、枕もとには赤く染まった鉢植え。横たわり、色白で血色の悪い顔色をした正岡子規との対比がとても印象的だ。

また、下絵と本画を比較すると、いくつか異なる部分が見つかる。「硯と筆」や「書物の柄」はそれこそ物が移動したり置き換わったりしたことによるもの差異かもしれないが、左上方から障子越しに射す日差しが強さは、下絵よりとても強く、それこそ現実より強く描かれているのではないかとさえ感じるのは気のせいだろうか。

これも上記のとおり強弱の対比なのか、それとも死期迫り天から射す淡い光を示しているのか、果たして作者も明確な答えを見出せているのだろうか。

下絵の時、本画の時、その景色の捉え方が変化しているところに、時の流れを感じる。

[木偶の坊]

禁 無断引用・転載

武蔵野市立吉祥寺美術館 2020年度企画展

所蔵作品特別展示 たいせつなじかん

会期：2020年10月31日(土)～12月13日(日)

会場：武蔵野市立吉祥寺美術館 企画展示室